

## 第四章

### 闇と風の中

## 震災と受験

須磨区 梅木さやか（二十七歳）

震災のあったあの時、私は大学受験を控えた受験生でした。たしかセンター試験があった後で、「みんなセンター試験はどうだったのかな？明日学校で会ったら聞いてみよう。」と思いつながら布団に入ったのを覚えています。

そしてあの地震。下から突き上げられ、その後横揺れが続き、逃げようと思ったのですが動くことができず、布団を頭からかぶることしかできませんでした。その時「死ぬ」と生まれて初めて思いました。そして「死にたくない」とも思いました。

揺れが収まった後、家族でリビングに集まりました。電気が止まっており、テレビも電気もつかず、一体何が起きたのか分かりませんでした。夜が明けるまでは懐中電灯をつけて過ごしました。

日が昇り、部屋の中の様子が分かるようになりました。たんすが倒れ、テレビがテレビ台から落ち、食器棚から落ちた食器が割れていました。もし、頭の上に落ちてきたら……と、ぞっとしました。

その後、大分の田舎と連絡がつき、神戸で大きな地震があり大変な被害が出ているということを、私は初めて知りました。

水をもらうのに、寒い中ペットボトルを持って、何時間も並びました。その帰りにパン屋さんからパンのいい香りがしてきました。そのパンを買うのにもすごく長い行列ができており、何時間並んだらパンを

買えるのか分からないような状態でした。

道路には自衛隊の車が何台も走っていました。今まで蛇口をひねったら水が出て、電源をつけたらテレビが映り、電気がつくという当たり前と想っていたことが、当たり前ではなかったんだと痛感しました。

私の家は被害が少なく、電気・ガス・水が数日で復旧しましたが、その間家族四人でただ「生きる」ということに力を合わせ、協力し、こんなに長い時間を四人で過ごしたのは初めてではないかというぐらい濃厚な時間を過ごしました。

しかし、ライフラインが復旧し、少しずつ今までの生活に戻ってくると「受験生」という現実が私の目の前にせまってきました。試験会場の大阪までは、震災前は一時間で行けていたところを電車を乗り継いで三時間かけて行きました。変わりのない大阪の街を見て、神戸との違いに驚きました。高いビルを見ると、ビルが傾いているような錯覚に陥りました。

二月にあった試験はすべて落ちて、落胆しました。それまでは「生きているだけでいいじゃないか。それに比べたら受験なんてたいしたことない。」と思っていたのに、そんな風には思えなくなっていました。テレビを見ると、自分よりもずっと被害が大きかった人やボランティア活動でがんばっている人がいるのに、私はどうしてこんなことで悩んでいるんだろうと自分を責め、苦しい日々を送りました。「あの時死んでいればこんな苦しい思いをしなかったのに……。」と思ったこともあります。

私の計画では、二月末にある卒業式までには大学が決まっている予定だったのですが、本命校の受験が一カ月のびたこともあり、卒業後の進路が決まらないまま卒業式を迎えました。そして卒業式の翌日、愛



知県の大学から繰り上げ合格の通知が来たのです。思ってもみなかったことで、涙を流して喜びました。救いの手が差し伸べられたように感じました。その後、本命校も合格したのですが、私は愛知県の大学に行くことに決めました。

大学に入ってから、出身が神戸ということ、「大丈夫だった？」と新しく人に出会う度に毎日何度も聞かれ、しんどい思いをしました。

その当時住んでいたアパートが一階で、夜寝る時に布団に入り天井を見つめ「二階が落ちてきて、私は死ぬんだ。」という思いが頭に浮かんでいました。テレビで地震情報が流れる度に「また神戸で大きな地震があつて、家族が死んで、私一人だけが取り残されたらどうしよう。」と不安になりました。

自分でも一番びっくりしたのが、急に停電になって部屋が真っ暗になった瞬間に恐怖が起こり、「怖い。」と泣き叫んだことです。その時は、たまたま友達と一緒におり、「大丈夫だよ。」と手を握ってくれました。停電が終わるまでは、心臓が飛び出しそうなほどドキドキして、汗をかき、怖くて動くことができませんでした。その後も何度か停電があつたり、軽い地震があつた時は、友達が電話をしてくれたり、アパートまで駆けつけてくれたりしました。友達の優しさに本当に感謝をしています。

実家に帰省をする度に、電車の窓から少しづつ復興していく神戸の街を見ました。時間が経つにつれて、私も地震や停電が怖くなくなってきました。そして、大学を卒業し、また神戸に戻ってきました。

振り返って見ると、震災で辛いこともありましたが、得たものも多かったです。もしあの時地震がなかったら、私は地元の大学に行き、そこで全然違う人たちと出会い、違う経験をして今とは別の人生を歩んでいたことでしょう。そう思うと不思議な気分になります。自分でも時々「今ここでこうしているという

ことは、何かの縁だったのかなあ。」と思う時があります。きっと、震災で人生が変わったという人はたくさんいるでしょう。まだまだ思い出すと辛い気持ちもよみがえって来ますが、この十年という節目に振り返ってみることができて良かったです。今まで誰にも話したことがないことをこうやって文章にできたということは、自分の中で押し込めていた思いを少しは整理できたということかもしれないと思っています。



## ドン グラグラ〜

長田区 島崎陽子（六十五歳）

ドン グラグラ〜ドスンと突き上げられるような激しいゆれ。タンスの上に乗せていた衣類箱が落ちてくる。一体何が起ったのか、わけが分からないまま、動いたら駄目だと思えば布団の中でジットしていたが揺れは何度もおそってくる。後で見ると、頭上十センチ余りのところへ、洋服タンスが倒れていた。もう少し上に布団をしいていたら下敷きになっていたかも……。

しばらくすると子供達に「何をしているの！ 早く起きて外へ出ないとあぶないよ。」と言われ、衣類

を着替えるのもウロオボ工のまま、手を引つ張つて起こされ玄関へ。障子等の動きも悪く、玄関では金魚の水槽が玄関口に飛んでいた。

外にでると道路はさけ、水道管は破裂して水が噴き出し、ガスのにおい……まるで映画の世界のよう。これは夢なのか、現実なのか、放心状態で立ち尽くす。

小学校に避難すると、すでに被災者でごった返していた。家から持ち出した毛布に家族四人で巻き寿司状態になつて休むが、頭の中はまっ白……。暗闇の中、不安な気持ちのまま二日が過ぎる。友達・親戚・会社関係の知人から救援物資が届き、くずれ落ちた家の中から荷物を運び出し、止まっていた時間が少しずつ動き始めた。皆様の優しい気持ちがい尽くせないほどに嬉しかった。

次は家探した。しかし、がれきに埋もれた町中でそう簡単にはみつかる訳がない。仮設住宅に入居できた人達はまた幸運なほうだった。不満の声はいろいろと聞こえてきたが、それでも何かにつけ優先的に救援を受ける事ができたようだ。でも、入居できない私達には公的機関からの援助もなく、救援物資すらほとんど受けることができなかった。

今までは当り前のように使っていた電気、ガス、水道のない生活、壊れる事等ないと思っていた家の全壊、これから先の生活はどうなるのか、と直面する苦労の連続で、毎日をどんな思いで過ごしたのか。

そして十年たった今、やっと生活基盤が整い、人並みの生活ができるようになったのは、一致団結した家族の絆と、周囲の人々の温情のお陰だと感謝の気持ちでいっぱいである。

この思いを風化させてはならないし、いつまでも語り継ぐべきだと心底思う。

## 風化させないで

垂水区 座古谷寿美

平成七年一月十七日早朝、大きな揺れで飛び起きた私はすぐに地震と気付いたが、その大きな揺れと大きさに玄関で動けなくなつてしまつた。そして物の倒れる音や落ちる音を恐怖の中で聞いていた。

震源地が淡路島北淡町と聞いた時、垂水の被害が一番大きいと思つていたが、テレビに写し出される映像を見て、垂水区以外の地区の被害の凄さに呆然としてしまつた。増えてゆく死者の数、知人、友人の安否……。

数日後板宿まで行つた時、テレビに写し出される映像ではなくて実際にそこで見た光景は忘れられない。傾いたビル、二階が一階になつている家、ペシャンコになつた自動車等々、神戸が壊れてしまつたと思ひ、涙がとめどなく流れた。

また長田の鷹取地区に立つた時、まだ焼けこげた臭いの残る一面の焼野原に声も出ず、戦災の時もきつとこのような風景だつたのだらうと思ひながら、その酷さに身体が震えていた。

そんな中、人々は慰めあい、励ましあつて力強く街の再建に取組んできた。震災後十年、高層ビルが立ち並び街はどんききれいになつて、震災の爪跡はほとんど消えてゆくが、裏通りに入るとまた空地が残つている。そのうちそれも無くなるだろう。

しかし、あの震災を経験し現場にいた我々にとってあの日の恐怖や悲しみは、命ある限り忘れることは

ない。

そして無になった時の人間の強さ、優しさ、潔さも。震災を乗り越えた神戸の人々の原点がああ震災であり、その上に今の生活が営まれている。

震災で亡くなった六千余の人々のためにも決して風化させてはいけない。

## 愛着ある下町

長田区 大河原京子（六十三歳）

私達が住んでいるこの辺り（長田区二葉町）は、震災前から神戸市の都市再開発区域に指定されていた。ですから、地震で倒壊した家々は、一軒また一軒とガレキが取り除かれ、更地になり、気がついたらまわりはフェンスに囲まれた空地だらけになっていました。

ここ数年で近代的な高層ビルが何棟かそびえ建ち、大正筋商店街も新しくきれいになったのですが、土曜、日曜でも道行く人の数はまばらです。それに緑もほとんど見当たりません。下町の喧騒と活気の中で育ってきた私達には、何かよそよしくて人のぬくもりが感じられません。

それでもここを離れたくない一番の理由は、親戚や幼な馴染みの人達、気おけない友人や知人が元気で、この地域に歩いてすぐの所に住んでいるからです。街の顔は変わっても人の心は昔のまま、冗談をい

い合つて助け合いながら楽しく暮らしております。この年になって見知らぬ土地で暮らすことなど考えられません。

それにしても、都市再開発のために市が紹介してくれる代替地は今住んでいる場所に比べて、環境といい、面積といい、あまりにもかけて離れています。「希望を言ってもらったら困ります。」という言葉に代表されるように、お役所の人達は我々一般市民の意見や希望を「いちいち聞いていたら仕事にならない。」と考えているようです。親の代から数えて八十年以上も住んでいる愛着あるこの土地を出ていかなければならないのであれば、せめて今の半分でもいいから生活環境や条件に近い所を希望するのは、私達のわがままなんでしょうか。



## 地割れの恐怖

長田区 尾張富子（七十五歳）

一月十二日、友人が「神戸に地震なんか起らないね。」と何となく言った。私は「兵庫県では但馬地方で昔、大きな地震があったと聞いているから神戸もわからないよ。」と答えた。その五日後にあんな大きな地震が起るとは、予想もしないで言ったことだった。

寝ていると一瞬大きな揺れで目が覚めた。すぐ下向きになり頭から掛布団をかぶった。

揺り籠の大揺れのように、短い時間なのにとても長く感じた。じつと揺れの収まるのを待っていた。布団の上に、吊ってあった服がどんどん落ちてきて重くて動けなくなってきた。回りは暗くて分からない。手を出してさわってみると、黒くて大きなかたまりのような物があり「なんだろう」と思った。

明るくなってから見てみると、テレビが枕元まで飛んで来ていたのだ。もうちょっとで頭の上に載っていたのかと思うとぞつとした。

入口の戸が開いたので、ホツとして階段を上がり屋上へ。南の方を見てみると一面火の海だった。それがどんだん北に西に東にと広がって行く。あのマンションにも火が入った。火の勢いはますます激しくなる。潰れた家屋の下に人がいるだろう。ここからは見えないが火の中を逃げまどっている人もいるのではと思うと、戦災の時、火の中を逃げた私にはダブって見えた。炎の広がりや寒さとで体が震えてきた。

外が少し明るくなり、出てみると、家の前の広場に大きな木の幹の影が黒く見える。何だろうと思つて見ると、それはその広場に大きく開いた地割れだった。地震の時、そこに人がいれば何十人が落ち込んだろうと思つた。

まだ余震が続いていた。外は寒かったが家には怖くて入れない。近所の人が毛布を掛けてくれた。暖かくホツとした。少し離れた道のそばの家屋は、軒並みペチャンコ状態だったので、大きな地震だったんだと初めて知つた。

このあと、元の神戸に復興するには、十年はかかると言われていたが、まだ今でも空地が残っている。心や体に受けた怖さはいつまでも忘れられない。

## 前進あるのみ

須磨区 厚見和子（六十四歳）

平成七年一月十七日午前五時四十六分、あのような大震災に遭遇するなんて誰が想像したでしょうか？まして自宅が全焼してしまうなんて……。あまりのショックで涙も出なかつたように思います。人間本当の悲しみにあうと涙は出ないという事を身をもって体験したように思います。涙が出るあいだは本当の悲しみではないのかとさえ思いました。

何一つ持ち出すこともできず、それこそ身一つで一月の寒空に飛び出し、けががなかつたのがせめてもの幸せだったように思います。

平成八年七月にもとの場所に自宅を再建し、少しずつ生活の「復興」に向かっていますが、いまだ元にもどつたとは言いきれません。「震災と復興」忘れられない重い言葉です。

本当のところ平成十四年一月十七日で震災のことは忘れようと思つていたのです。忘れられないけれども、いつまでも引きずるのをやめようと思つたのです。

だが、今だに残念でたまらないことがあるのです。それは子供達の成長の記録「アルバム」を焼いてしまったことです。今、孫達の成長過程の節々で、七五三・入学式・成人式等々を迎えた時など、娘、息子すなわち孫達の父親、母親の当時の写真を見せられたらナァ……と思つたりします。これも無い物ねだりの一つです。しかし、十年たった今、今度こそ「前進」あるのみです。



## 生涯現役で

明石市 川井通代（六十三歳）

「ゴーという地鳴りのような響きと、大きな揺れで飛び起きました。身体がふるいにかげられたようでした。「神様」と思わず口走っていました。あのような地震がくるとは夢にも思っていませんでした。」

「独り暮らしを案じて近所の人、妹の家族がかけつけてくれました。信号も消えた異様な街の中を、弟家族のいる実家へと向かいました。一カ月、半壊となった実家に身をよせ、弟家族と頭を並べて寝た安心感・身内のいる暖かさ・心強さを感じました。」

「何がなくても元気でいられたらとの思いから十年、今なお仕事のあることの喜びを感じています。」

「そしてこの十年間に親族の大病、思いがけない人の訃報が続き、命のはかなさ・尊さを思い、今日一日を無事に暮らせる事を大切にしていきたいと願っています。」

「周囲の人達の力を借りながらまた、私自身も人の役に立つ事を願い、生涯現役で過ごせるよう体力作りに励みたいと思っています。」



良き事聞く文様

まさかりの古語「よき」と琴の字をくずしたものと、菊の花で「よきこときく」と読ませる。

## なぜ どうして

東灘区 高田千歳（七十四歳）

「阪神淡路大震災で、わが家は類焼によって全焼した。」

「わが家の四軒ほど東隣りの倒壊した家から出火した。消防車が来て消防活動を行なったが、消火途中で「水がないから。」と言って帰ってしまった。再び燃え上がった火は、もう手のつけようのない勢いで、一画十一軒が焼け落ちた。」

「なぜ最初の軒の火を鎮火させるだけの「水」がなかったのだろうか。そのためどれほど多くの人が、類焼によって家や、もつと大切な命を失ったことか。」

「そもそも火事は地震につきものだが、この地震について神戸市民の多くは「神戸に地震はない」と思っていたように思う。それがごく普通の意識だったのではないか。いったい誰が、いつごろから言いだしたのだろうか。そしてそれをなぜみんなは受け入れたのだろうか。」

「私はこれまでに、昭和十九年の東南海地震、昭和二十一年南海地震と、二度もこの阪神淡路地区で経験したのに、なぜ同じように思っていたのか。情けない。」

「しかし、これは私や私たちだけでなく、神戸市も同じだった。」

「神戸市は、昭和四十六・七年に、大学や専門家に地盤や震度など地震に関する調査を依頼し、「神戸は活断層の上であり、大地震、直下型大地震のおそれあり」との警告を受けていた。」

にもかかわらず、市は「神戸に大地震はない」として、「震度五」を基にした防災対策を樹てたのだ。ポートアイランド大橋架橋の時も、専門家から強い危惧が出されたが、基本は変わらなかつた。そのため、大橋は壊われ、ポートアイランドにある神戸市が誇る最新設備や最先端の技術を持つ市民病院や、その他重要な拠点が緊急時にはほとんど役に立たなかつた。

防火対策も「震度五」が基であつた。そして防火の第一を上水道を使うことにした。というのも、神戸市街地は上水道がほとんど完備していたので、それを利用することにした。だから地下の防火水槽の必要性をあまり認めなかつたのか、その数は東京都の十分の一以下しかなかつたといわれた。だから、激震ですぐに水道管はずたずたに破壊され、水は出ず、地下水槽もなく、川も埋めて道路にしてしまつている有様で、水がなかつた。

これが、最初に出火した一軒の家さえも消火できず、市内を火の海にしたのだ。どうして神戸市は、専門家に依頼しながらそれを受け入れなかつたのだろうか。何を根拠に「震度五」としたのだろうか。「震度七」にすると膨大な費用が必要となる。しかし市が取り組むべきことは多く、地震対策だけに力を入れるわけにはいかなかつたからだろうか。他のバランスから考えられたのだろうか。「なぜ・どうして」の疑問は、震災後十年を迎えようとする今でも消えない。そこで先日、思い切つて消防署に出かけ、話を聞いてきた。

震災当日、消防署の人たちも被災者であり、また、交通も遮断され、なかなか人数が揃わなかつた。それに、その当時は消火よりも救命活動が優先になつていた。

震災後も、消火方法は上水道中心であるが、水道管は（これは水道局の管轄だそうだが）今までより太く強化し、管の途中に大容量貯留システムを作つた。管の接続部分は、揺れに合わせて動く柔軟性のあるフレキシブル管にしたものと取りかえつつある。防火水槽の数もぐんと増やした。また海水利用の方法や、大量送水車など種々改善に取り組んでいる。

「ほんとにあの火災の時は、私らも辛い思いをしました。水が出なく、ほかのいろいろ手段をとつたがだめでした。」と猛火を前にした無力さと、被災された方々への申し訳ない気持ちを涙ぐみながら話された署員の方をみて、心を打たれた。

地震はいつ起こるか分からない。だからこそ市当局は、百年の計をたて、そこへ到達するために、一里塚となるような小目標をたて、それを確実に実施していくべきである。

そして市民は、市の実施状況をしっかりと見とどけないといけない。「風化させない」ことになると思ふ。





## 類焼して

灘区 T・K（七十歳代）

築十二年の家が震災でその日のうちに延焼によって目の前ですべてのものが灰になり、ただ呆然と見つめるのみ。あきらめと後悔……。大勢の人が同じ体験をしました。

避難所等を転々とし、八月にやっと北区の五社仮設住宅に入居できました。そして十二月には、住宅の自治会ができた役員のお手伝いをするようになりました。

有野台地区のボランティア、キリスト教会、灘区の「元気村」、遠くは高槻の教会、たくさんの方々のお世話で食事会や喫茶、手作り教室などで皆さんとおしゃべりしながら楽しいひとときを過しました。ただ、感謝。「元気村」からは、毎月お米二キロの配給があり大変ありがたく思いました。

しかし若い男性の自殺、三名の方が孤独死で後日発見される、という悲しいこともありました。手作り作品を見るたびに、楽しかったひとときと、辛かった我慢の四年間が、思い出されます。

一人暮らしですので、住み馴れた灘区での自宅再建はあきらめました。中央区の復興住宅に入居し五年が過ぎ、地元の老人会に入り役員のお手伝いをして、少しでもお役に立ちたいと願っております。